

強みを最大限発揮する ～光り輝く宝石発見～

報告者 ソイルセンター 職員一同

作成者 河野 薫

昨年の研究集録の見開きに磯村さん（以下：本氏）のレジン作品の写真「宝石」を掲載して頂いた。

本氏に出会ってから8年間、様々な支援を通して成長した記録を以下に記していく。

1. はじめに

社会福祉法人蓬莱会ソイルセンター（以下：当事業所）は2008年に開所し、13年目となる生活介護事業所である。1日あたり平均20.6名が利用され、平均区分は4.3となっている。主に自閉症スペクトラム、知的障害、ダウン症の方が利用されている。

当事業所の活動については、缶作業、外部委託作業（広告の折り込み・PC分解・ビニール剥がし）に加え、健康維持のためにスポーツやダンス、音楽療法、余暇活動にカラオケや創作を提供している。その中、個別活動も充実しており、職員がお願いをした文書をパソコンで作成する方、職員から個別にパソコンの使い方を習う方、来所の楽しみとして職員とクッキングを楽しむ方もおられる。今回は、作業に参加する傍ら個別活動に取り組みされている一人の利用者を紹介したい。

2. 本氏について

年齢 : 26歳
性別 : 男性
障がい名 : ダウン症 モザイク型
知能指数 : IQ46
家族構成 : 母・弟3人（県外1人、市外1人、市内1人）現在は母と2人暮らし
コミュニケーション : 簡単な話し言葉（平仮名・簡単な漢字を書くことができる）
特性 : 笑顔も多く人懐っこい。しかし、初対面は人見知りがある。騒がしいことが苦手で、穏やかに過ごすことを好む。おしゃべりが得意で携帯でアニメ、ゲーム、怖い話等々、様々なジャンルの話を人に話すことを好む。自宅で色々調べたことを職員に教えてくれる。嫌なことがあった時、要求をしたい時など、自分の想いを伝えることが苦手。伝えられないと殻に閉じこもったように、表情が険しくなり黙ってしまう。最近は見られないが、過去には“もう一人の自分が頭の中にいる”と言いながら、別人格の自分と話をすることもあった。

3. これまで

本氏は2013年に高等部を卒業し、当事業所と他事業所（生活介護事業所）へ週5日の通所

を始める。しかし、当時は新しい環境に慣れず当事業所を無断で帰ろうとすることや休むことが多く見られた。来所しても別室に閉じこもり他者と関わろうとしない日が頻繁にあった。本氏と向き合うきっかけがほしいと思っていたが、なかなか見つからず。2014年に当事業所の場所が移転したことをきっかけに、月～金曜日まで週5日の通所を始める（これまで通っていた他事業所が、女性のための受け入れ事業所となったため）。以後、本氏と関わる時間を増やした。本氏と向き合い始めた当初は、両者が探り探りの状態であった。分からないなりにでも関わることで本氏を知ることにつながると思い、一言二言の会話をしながら少しずつ関係性の構築を行なった。コミュニケーションで上手くいくことも増えていたが、急に不機嫌となり、事業所を出て行き、職員が追いかけることもあった。

数年かけて“将来は車屋さんになりたい！”という夢ができた。車屋になるには、日々働かなければならないこと、お金も貯めなければならぬという理由で就労事業所を検討した。当事業所に毎日通い、作業も継続的に取り組むことができれば就労事業所へ通所できる目標を立てた。その目標を立てることで、日々作業にも取り組むことができるようになった。

高等部卒業して4年後の2017年3月、目標としていた毎日の通所と作業に取り組むことができるようになった。本氏は生き生きとしており、就労事業所へ行けることを楽しみにしていた。金曜日以外の当事業所の通所は継続し、月～木曜日は就労事業所へ通うこととなった。意気込みは良かったが、本氏が思い描いていた事業所とは異なったこと、そして自分の想いを上手く言葉で表現ができなかったことで、通うことが困難となった。幾度か関係者間で会議を重ねたが、2カ月程で就労事業所を退所することとなった。

挫折した本氏は金曜日のみ当事業所に通所し、それ以外は自宅に引きこもることとなった。自宅ではカーテンを閉め切り、さらに部屋を暗くするためにドアの隙間などに新聞を詰めることをしていた。当事業所の利用時には楽しく話していたかと思うと急に険悪な表情になり、“もう1人の自分”と言い、頭の中の“別人格”と話をすることが多々見られるようになった。“もう1人の自分”については定期的に医師には相談をしており、服薬調整なども行なっていた。

本氏、相談員、母と話をし、2018年1月より月曜日と木曜日に他事業所（生活介護）に通うことになる。最初は楽しく通っていたが、無断で帰ることもあった。手先が器用な本氏はビーズやまんだら塗り絵に出会い、ビーズで指輪やブレスレットを制作し、ペンを使ってきれいに塗り絵をして素敵な作品を作り上げていた。家族や職員に褒められる・認められることで再び少しずつ心を開いてくれた。しかし、2018年8月に月曜日と木曜日に通っていた生活介護事業所が閉鎖となり、木曜日は当事業所へ通所することとなった（月～水曜日は自宅、木曜日・金曜日は当事業所）。

母の希望もあり、月～水曜日は他事業所の通所を検討し、2020年9月から月～水曜日は他事業所（生活訓練）に通っている。通い始めはスムーズで拒否も少なかったが、半年が経過した頃から拒否が見られるようになった。過去、就労事業所を退所した後、自宅に引きこもったことがあったため、無理をさせずに3日の内2日間は通えれば良いこととなる。それでも他事業所を抜け出して帰ろうとすることがあるが、当事業所に来所した時、頑張っていることを認め、褒めることで現在も通所ができている。

上記の過去の状況から、なぜ無断外出をしたり、通所拒否をすることがあるのか、そして自分の意思を伝えることが難しいのか、その理由について以下に考察していく。

4. 活動から見てくるもの【当事業所の個別活動時間に本氏が行なってきたこと】

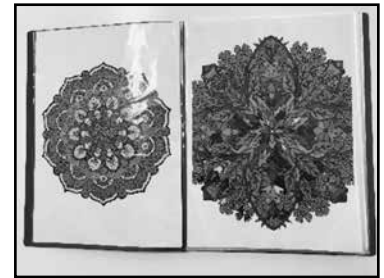
絵画

元々絵画が好きということで、2018年に職員の勧めた絵画を制作する。波の絵をお手本にして描く。雷は自作で描く。当時、自分の想いをうまく伝えることはできず、別人格の自分と話をしていることも多く見られた。



マンダラ塗り絵

細かな色使いでマンダラ塗り絵を塗る事に集中していることをよく見かける。本氏のモチベーションアップのためにファイルを作成した。油性サインペンを使い、細かい所まで丁寧に塗る。家族、職員に見てもらい褒められることが多いが、職員と一緒に作業することはなく、1人で黙々と取り組む姿が多くあった。塗り絵を真剣に取り組まれていたので、パソコンでできる塗り絵を提案する。「面白い、楽しい」と笑顔で取り組むも、以前と同様に別人格と話をする様子は見られた。その他にも、ビーズやスクラッチ塗り絵に取り組む。



ビーズでは、ブレスレットや指輪、ネックレスを作り職員に「プレゼント」とあげることもあった。

スクラッチ塗り絵では黙々と取り組み、何十枚と出来上がっていった。どれも、職員と共有しながら取り組むことは少なく、単独で作品を作っていた。制作時に納得ができない仕上がりになった際には気分が落ち込むことがあった。



※上記の各個別活動についてはどれも取り組む期間は短く、長くても数か月で次へと移行している。

5. 課題に対するアプローチ

個別活動時間に注目すると、本氏が他者と関わる時間は極めて少なく、また、想いの表現も難しい状況であった。そのため、まずは本氏との距離感や信頼関係の構築に力を入れることが必要であると判断した。

また、手先の器用さが強みとしてあったため、この力を自己肯定感や自己表現力・コミュニケーション手段に変換することができるのではないかと。そのようなことに着目しながら支援を進めていった。

作品づくりを通して

- 【目標】 I：困難が生じた際はヘルプを出せる
- II：自身の想いを職員に伝える
- III：できると自信をつける

上記目標を計画し、職員がレジンの本氏に紹介する。新しい（レジン）活動を取り入れたのは以下の理由からである。

【理由】 I II：意図的な困難場面の設定ができること

＝ヘルプが出しやすい環境・自身の想いが表現されやすい環境

III：新しくチャレンジができること

＝楽しみの拡大・難しさの共有→解決へと導く思考（上手くいなくても成功に転換できる環境）→上手くいくことへの自信

この3点に特に留意しながら2020年6月に支援を進めていくこととした。

支援当初はレジンが紫外線（太陽光）で固まることなどの性質を理解するところから細かく伝えていった。過去に無断外出が頻回にあったため、外に出て太陽光でレジン固めることに抵抗があったが、目的を明確にし、予め確認を行なった。レジンの固まる様子を観察したり、どのようなデザインが好きかなどについて、あまり深い会話は望めなかったが、その限られた時間を出来る限り充実できるように設定した。以前に起きていた無断外出のことで当事業所での生活に制限がかかっていたが、環境を設定することや本氏を信頼することで解決できることも多くある。外に逃げてはダメと伝えるのではなく、逃げていく理由は何か？…その本質を明らかにしていく必要がある。その為には本氏はその時間に目的や楽しさを感じてもらえる環境作りや職員の柔軟な視点・対応、相互理解が重要であると感じている。職員の意識を柔軟に考えていく必要性を感じた場面であった。

既製の型でレジン作品を制作していくことで、レジン液の取り扱いなどの留意点を学ぶことができ、ますます熱中する様子が見えてきた。

2020年9月末より、新しい技法での作品作りを職員が提案してみたところ、「やってみたい」と発言があった。元々ドラゴンやユニコーンなどの架空生物が好きだったこともあり、ドラゴンアイ（龍の眼）の制作に取り掛かる。今までの型に沿って制作してきたものとは制作工程が大きく異なるため、当然難しさが生じた。特に眼の立体感を表現することには試行錯誤を重ね、化粧時に使用するラメパウダーや絵の具を使用してみたが、上手く表現は出来なかった。携帯電話で龍の眼の画像検索を行ないながらイメージを膨らませた。検討を重ねた結果、ラメ入りのマニキュアを使用してはどうかという話となった。女性職員が自宅で使用していないマニキュアを持って来てくれ、早速試しに塗ってみたところ、光が上手く乱反射し、立体感を表現できることを発見できた。（写真1）制作手順については、最初は職員が手本を見せ、その後に工程を伝えた。意図的な環境として、あえて大まかな工程を伝えることで上手くいかない場面に繋がりがやすい設定とした。制作途中で上手くいかなかった際に“なぜ上手くいかなかったのか”その原因をしっかりと振り返り、再度チャレンジすることで“成功する”に繋げていくことを重要視した。上手くいかなかったことを“失敗”として捉えず、その出来事をヒントにあらゆる方向から解決策を考え、見出していく。これは今後の人



写真1

生においても最も大切なことだと思う。上手く行なえた際は、どの部分が良かったのか、相手（職員）に伝えることを留意しながら、とにかく本氏と向きあった。具体的に物事を相手に伝えることは非常に難しかったが、その際に“open question”と“closed question”を上手く活用していく。本氏の調子が良好でなく、言葉数が少ない時は“closed question”の割合を増やす。“open question”を入れることで、黙り込んでしまうこともあったため、慎重に本人の想いを聞き出した。その時に本氏の目の動き、声のトーンや身体の動きなどあらゆる行動に注視し、全神経を本氏に集中し、傾聴した。言葉で上手く表現ができない部分には、実際に上手くいかなかったレジン作品のどの部分が難しかったのかを具体物を用いて伝えてもらった。その表現が“ここ”と指差しをしても構わない。どのような表現を行えば相手に届くのか、その過程を大切にしたい。そのような時間を共有することで、自然と本氏の言葉数が増え、気が付けばその時間帯は“別人格の自分”が出てこなくなっていた。自信が持てない時やどのような工程へ進めていけば良いのかわからない時に相手に伝え、問題が解決へと向かう経験を積んでいく事は、今後の人生での困り感を乗り越えていく力となる。

開始当時の職員の制作介入率はおおよそ90%。それが今では逆転している。自信が付き、自慢げに「これでどう？」や「この部分はどうしたらいいの？」と制作途中の工程を見せてくれる。自発的に次回の予定を確認したり、出来上がった作品を様々な人に見てもらいたいことをずいぶん表現できるようになった。出来上がった作品について「本当に上手くできるようになりましたよ」と伝えると、とても嬉しそうに笑っている。時間の経過とともに、本氏がデザインを行なうまで技術が向上し、さらに“美しく”を目指して取り組んでいる。

6. レジン制作を通して

レジン制作を開始して1年以上が経過し、作品数は15個を超えた。その間に家族や職員に褒められ、ますます意欲的な様子が見られている。

制作を進めていくにつれ、新たな目標が見えてくる。それは、自分の作品を世に広め、売っていくこと。そして、得たお金で好きなゲームなどを購入することである。

数年前までは、自分の殻に閉じこもり、支援や通所の拒否をしていた本氏であるが、日々事業所に通うことができ、さらに自分の気持ちを表現できるようになっている。

当初掲げていた目標（Ⅰ～Ⅲ）は“ゆうあい祭りで自分の作品を知ってもらおう。そして売りたい”へと変更し、それに向けて日々取り組んでいる。

7. この1年間で変化したこと

以下の表のように、これらの経験を通して、この1年で大きく成長をした。

課題となっていたこと	<ul style="list-style-type: none"> ○事業所を抜け出す ○帰りの送迎車に乗れない ○別人格と話す（頭の中のもう一人と話す） ○自己スペースに閉じこもり、行動が停止する
↓	
変化したこと	<ul style="list-style-type: none"> ○外に出たい・帰りたいと言わなくなった →話しができる職員が増えた（ラポール形成） →自分の想いが表現できるようになった →目的・目標・役割が明確になった（レジ制作） ○送迎車には定時に乗れるようになった →話しができる職員が増えた（ラポール形成） ○別人格と話すことが少なくなった →実際の他者と話すことで、必要性がなくなった ○自己スペースに閉じこもり、行動が停止することが少なくなった →自分に自信が付き、活動的になった 上手くいくことへの自信 →困難なことが起きて乗り越えられる力

以前は事業所に到着しても玄関前で立ち止まり、入室できるまでに20分以上の時間を要することがしばしばあった。行動難による活動不参加や自己スペースに閉じこもることが頻回に起きていた当時と比較すると、現在はその行動面は明らかに改善している。様々な関わりや取り組みを通して、自信や希望を持っている。

レジ制作を通して、変化したのは本氏だけではない。レジに取り組んでいた職員を見て感化されていた職員も多数いる。少なからず、私もその一人である。机上で学んだことを元に支援するも上手くいくわけもなく、試行錯誤しながら支援を続けている。“ここ真似してみよう”“そんな風にしたらいいんだ”と実際に見て聞いて学ぶ。その技を同じように使っても上手くいかない時もある。技を自分色に染めていく。このことを繰り返しながら、支援を行ってきた。教科書に書いてあることは基礎であり、実践は応用問題を解いているようである。解けた時、嬉しさに加えて利用者の笑顔も見ることができる。今回のレジ制作を見て、このようなことを感じている職員は私だけではないと思う。

8. おわりに

どんなに障がいが高くとも、環境を整えば自立した生活を送ることができる。この言葉をどれだけ考えて日々の支援に臨んできたのだろうか…。ご利用者と共に課題に向かい、時には一緒に苦戦しながら、一緒に乗り越えていく。それをコツコツと取り組んでいく。支援は一朝一夕ではなく、積み重ねが重要であることを理解しておかなければならない。本人の想いや強み・家族の願いを見つめながら支援をどのように組み立てていくか。私たちは支援員としての誇り・専門家としての意識を常に持ち、あらゆるニーズに対して解決へと取り組んでいく責務がある。1度きりの人生、一人ひとりの方が毎日楽しく事業所に通えるように全力で支援を進めていきたい。

9. 謝辞

今回、研究集録作成にあたり、ご協力をしてくださったご本人をはじめ、ご家族の方々、職員に心から感謝申し上げます。

ご本人は母と3人の弟たちに囲まれて育ちました。小さい時は母や弟たち以外にも祖父母や叔母等からもたっぷりの愛情をもらいながら育ったのは、穏やかな表情をしているご本人を見ればわかります。26歳になった今、車の運転ができるようになった弟と出かけることも多々あります。ご本人も、弟たちには感謝をしているとジュースをごちそうすることもあります。笑顔も多く、誰からも愛されるようなご本人です。この愛情はお金で買うことはできず、愛着形成はとても時間を要することです。これまで、たくさんの愛情で育てて下さったご家族の方々に感謝申し上げます。



「今日は何時からレジンをつくりますか？」

そう言って今日もレジン制作を楽しみにされている。